

大学生の英語能力向上のための取り組みと課題：
東北公益文科大学における英語教育を事例として

栗本 晶

東北公益文科大学総合研究論集第35号別冊 抜刷

2019年3月10日発行

研究ノート

大学生の英語能力向上のための取り組みと課題： 東北公益文科大学における英語教育を事例として

栗本 晶

はじめに

英語科目が必修となっている本学では、学生の学習意欲を高め、英語力を促進させるために様々な取り組みをしているが、TOEIC受験もそのひとつである。本稿ではTOEICの作成経緯や目的、本学でのTOEICの有用性と活用法、TOEIC受験が学生に与える影響と英語力への効果、またそれに伴う課題などを検証する。また学生の聞き取り調査からその他の英語教育関連のことへの改善点も浮かび上がった。

1. TOEICの歴史

The Test of English for International Communication（以下TOEIC）は、1970年代に日本人の英語コミュニケーション能力を世界のビジネス界で通用するレベルまで引き上げたいと願う日本人のプロジェクトチームの発案から始まった。米国のEducational Testing Service（以下ETS）に能力を計る基準テストを作成依頼し、完成したものである。ETSは1947年以来米国で、多く公共機関や学校関係のための公式テストを担ってきた非営利テスト開発機関である。2年の歳月を経て、1979年に初めてTOEICが日本の主要5都市で実施されたが、第1回のテスト受験者は3,000人であった。その後受験者数が増加し、今日では日本だけでなく多くのアジア地域や諸外国に拡大し、2017年の国内の受験者は個人に加え、約3,400の企業や学校から約248万人が受験している。（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会、2018）。

ETSが作成するテストの一つであるTOEFLのスコアは、英語を母国語としない学生が、英語圏の大学や語学学校に留学する際に提出しなければならない英語力証明書として用いられている。The SAT（a standardized test）は米国の四年制大学、The Graduate Record Examinations（GRE）は、大学院の入

学時の合否結果に大きく影響する試験として広く活用されている。このような試験と同じように、TOEICもまた専門家の手によって開発され、品質と公平さの基準（Standards for Quality and Fairness）に基づいて公平性、妥当性、信頼性の3点に留意しながら作成されている。またそのことを様々な観点から検証する研究も行なわれており、その論文閲覧もETSのウェブサイトでも可能である。

TOEICは今や日本やアジア諸国の多くの企業や団体、学校機関で活用されている。英語を率先力として重要視している大手の会社では、まずTOEICのスコアを提示させることから就職試験が始まる。就職後も会社側で目標スコアを設定して、採用や海外またはそれに関係する部門への異動や派遣、さらに昇進、昇給などの要件として活用され、社員の英語力向上、そして会社のビジネス発展に役立てている。

また2018年の独立行政法人大学入試センター（2018）によると、TOEICは2020年からの大学英語入学認定試験のひとつに選考されている。TOEIC Listening & Reading（以下TOEICL&R）は英語聴解力と読解力それぞれ5点ごとの具体的な数値で示され、合計10点から990点で評価されるため、現時点の自分の英語力レベルを詳細に知ることができる。

2. 本学におけるTOEICの活用法

本学では世界の文化や国際的な仕事に関心がある学生のために国際教養コースが用意されているが、特にこのコースの学生たちは英語力を磨くことが必須条件になっている。学生はまず初回TOEICスコアの具体的な数値で現時点の英語力を把握し、それを基準に次回テストの目標値を定め、勉強を続けることが期待されている。英語を使う機会の少ない環境では英語力の向上は目に見えにくいため、このような明確な目標が学習意欲増進につながると考えている。スコアアップを目指して継続的に学習した学生が、自分の頑張りが具体的に点数で示されることで、次第に英語力に自信を持つようになる。本学では学生がTOEICにアクセスしやすいように、学内で申請、受験できるTOEIC Listening & Reading Institutional Program（以下IPテスト）を、年2回実施している。また規定のスコアをクリアすることにより、IPテストの受験料全額助成、英

語選択科目の単位認定、留学費用助成などの制度を設け、TOEICに向けての学習のモチベーションを上げるためのバックアップをしている。

また実践的な英語運用能力促進のために、英語圏3か国（アメリカ、アイルランド、ニュージーランド）4大学での短期留学制度もあり、さらに希望者は大学での研修後に、1週間程度現地機関でのインターンシッププログラムに参加できる。学生の希望次第では、在学しながら中期や長期の留学もできるような多面的に配慮されている。学生がそこで得た異文化体験を自分の財産とし、卒業後は社会において有用な人材となることを目指している。

3. 学生によるTOEICの捉え方とそれに伴う課題と対策

このように本学ではTOEICを学生の英語学習意欲を高めるためのツールとして用い、留学経験を経てさらに大きく成長してもらいたいと希望しているが、実際のところ当事者である学生はTOEIC受験やその他の制度をどう捉え、どのように利用しているのか。まず、卒業試験として採用されているTOEICに対する台湾の学生の意識調査を確認した後に、本学の学生の聞き取り調査の詳細について述べる。

台湾では2003年より教育省が高等教育機関（HE）に対し、卒業条件としてTOEICをはじめTOEFLやIELTSなど国際基準に即した標準テスト（Standardized Tests）の採用することを提唱している（Hsieh, 2017）。123校の高等教育機関から返答のあった1527人の台湾学生のネット調査とそこから無作為に選んだ26名の学生とのインタビューでの意識調査が行われた。その結果、多くの学生がTOEICを卒業試験として用いることに肯定的な反応を示した。TOEICの内容に関しては、ビジネス社会で触れる現実味のある内容や多様なネイティブ英語に触れられること、多くの会社でTOEICを採用している事実などが、学生のモチベーションを高め、TOEICに前向きに挑戦する理由となったことがわかった。また、自分のスコアの推移からTOEICに対する信頼性を感じている学生もいたようだ。他の意見としては、単に集中して試験勉強すれば卒業基準になるスコアはすぐに達成できていると感じているので、それを卒業試験に用いることに意味を感じていない学生もいた。学生によって英語力に差があるため、卒業試験としての基準点数を何点に定めるかが台湾で

の課題のようである (Hsieh, 2017)。

本学在学中の国際教養コース選択者4名と卒業生2名を対象に、メールと面接による聞き取り調査を行った。主にTOEICに対する取り組み姿勢と考え方、本学の英語教育に関しての個人的見解など雑談を交えながら聞き進めていった。

調査協力者はすべて、TOEICは自分の現在の英語力を知る手立てとして有効だと考え受験しており、そのスコアは自分の英語力を反映していると感じている。しかし一方で、台湾の学生を同じようにTOEICの点数はセンター試験勉強のように攻略次第で上げられると考えており、スコアが上昇しても英語コミュニケーション能力が上がることにはならないという意見もあった。確かに採用しているテストTOEIC L&Rでは読む、聞くの能力のみを確認するものであり、言語コミュニケーションに必要な残り二つの話す、書くの技能が抜け落ちている。現在はアウトプット技能であるこれらの能力を評価するTOEIC Speaking & Writing (以下TOEIC S&W) も開発されているので、これからはその利用も考慮に入れる必要があるだろう。またTOEICだけに頼らず、授業の中で教員が英語を使い、学生とやり取りする場面を増やしていくことを望んでいる学生もいた。社会に出てからプログラミングに携わっている調査協力者からは、情報処理の授業にも英語を取り入れてもらえればよかったと回答している。

またすべての回答者は、受験理由としてTOEICの高得点(600点以上)は就職活動の際の自己アピールに有利だという点を挙げている。教員、友達との会話やふだん見聞きするメディアの中でよく報じられているTOEICのイメージが、学生たちにその有用性を植え付けているのかもしれない。このように世間に広く通じているテストを受け、そのスコアを上げることは、自分にとって利点であると考えるのは当然であろう。しかし実際に就職した学生は、自分の会社はスコアよりも個人的な資質を重要視しているようなので、スコアの実質的効果は感じていないと言っていた。実際のところ、各会社がどの程度スコアを重要視しているかは不明であるが、海外と取引のある会社などは、確実に社員に英語力を求めるだろう。多くの学生は就職活動が始まるまでは、進路の方向性はわからないので、学生時代から備えておくことは必要だ。

今回の聞き取り調査の中で、TOEIC受験に対する心理的苦痛を話してくれ

た学生もいた。彼女は英語力に自信がなかったので、初回受験に対しかなりの不安を感じていたようだ。回りの受験経験者からテスト中の長時間の集中力の辛さを聞かされたり、自分の未熟な英語力が明確な数字となって突きつけられる事実に恐怖を感じていたことなどが原因で、なかなか受験に踏み切れないでいたようだ。学習の成功体験のためには、このような一見些細とみられる不安や恐れを取り除くことが、認知理論の観点からも重要なポイントである。山口東京理科大学の調査結果によると、受験のモチベーションとして周囲の人たちの影響が大きいことがわかった。所属する研究室の教員により受験の勧めがあったこと、研究室の卒研生同士の密接な繋がりによる TOEIC 受験の触発と積極的な取り組みなどが、受験者の増加の理由として挙げている（池田、2018）。このように学生が身近に関わる人たちから受ける情報、励まし、働きかけ、切磋琢磨、触発などが TOEIC 受験を促すキーワードになるのではないかと思われる。さらに池田（2018）は調査を通して、英語を専門としている人以外からの働きかけの方が大きなインパクトがあると考えている。

今回の調査協力者である R は、大学在学中にある教員から TOEIC 目標 600 点と具体的な数字を示されたことで目指すところが明確になったようだし、学生 T は 750 点取れば就職活動に有利と聞いて目標にしたと言っている。また以前に、TOEIC 受験に消極的な学生は、ある教員から TOEIC の勉強をしても話せるようにはならないと言われたことを話してくれた。その教員は英語を母語とする外国人であったため、その発言は学生にとってより大きなインパクトとなって記憶されたようだ。外国語を学習する際に、学習者がその言語や学習過程に肯定的な価値観と態度を養成することが広範囲にわたって影響を生み出すと言われている（ドルニエイ、2012）。身近な教員たちが TOEIC 受験の目的や、他の学生が TOEIC をどのように活用しているかなどの実例を頻繁に話し聞かせたりすることは、まだ受験していない学生の恐怖感や、受験を無意味と考える気持ちを取り除く一助になるだろう。またティム・マーフィーは、年齢が離れていて社会的地位に差がある教師たちからの助言よりも、同年代の敬服している仲間的な存在からの働きかけの方が、若い学生にとってより強い影響があると述べている（ドルニエイ、2012）。先輩が自分たちの留学体験を語る機会に、意識的に TOEIC のスコアの推移や活用状況などに言及することも必要か

もしれない。本学では国際教養コースの学生に限らず、多くの学生に英語力を伸ばして欲しいと考えているので、こうした取り組みは重要になってくるだろう。

4. 調査対象者のスコア分析

ここで調査に協力してくれた6名の実際のTOEICスコアを通して、その伸長推移と要因を考えていきたい。それぞれの結果は受験時期も受験回数も異なっており、校内のIPテストのみの受験者もいれば公開テストの結果が含まれている学生もいる。まず初回のTOEICスコアが500点以上の学生2人の点数の推移を見てみたい。四年生でIPテストと公開テストを合計9回受けた学生Tのスコアの推移を見ると、7回までL R共に右肩上がりの向上を見せており、中期留学後のスコアは890点と跳ね上がっている。しかしその後の最新結果は中期留学前と同じ700点台後半に戻ってしまっている。この学生は音声付のTOEIC単語帳の勉強以外は特に何もやっていないとのことだが、帰国してからの外国人講師が勤務している塾でのアルバイトという環境が、リスニング力の維持に関係しているのかもしれない。もう一人の学生Rもまた受験の度にスコアが右肩上がり、1年間の留学後に、点数が180点増の845点になっている。この時、彼のリーディングスコアは280点から400点に跳ね上がっており、留学中に努力して多読をしたことが、リーディングのスコアアップにつながったと感じているようだ。またいろいろな本を読むだけでなく、要点を素早く掴めるパラグラフリーディングやスキミングの技術も習得することが大切だと言っていた。両者の共通点としては、初回TOEICスコアからもわかる通り、大学に入った時点ですでに基礎力があり、入学時の学力別クラス分けでは最上級のクラスに所属していた。二人とも幼い頃から親の影響で、英語の歌や映画に興味を持っていたことが、インタビューでわかった。また留学中の日常生活で、仲の良い友達ができることが楽しい思い出であり、Rはその友達との交流のためにもずっと英語学習を続けたいと考えている。

Tが在学中に9回も受験した理由は、常に自分の英語力の伸びを具体的な数字で確認するためだと言う。彼のようにすでに高得点を出している学生にとっては、費用全額返却という制度を利用できる校内のIPテストが、複数受験を

経済的に容易にしたと思われる。

一方、英語レベルが4クラス（中級）の学生Mは、国際教養コースを選択した後でも自分の英語力に自信がなく、やっと決意して受けた初回の成績は280点だった。しかし彼女は5回のTOEIC受験でスコアが毎回向上しており、3学年末までの間に、短期と中期の2回の留学経験もしている。短期留学後は90点伸長し、4カ月留学後の2018年12月の最新スコアは前回より210点の伸びを示している。椋山女学園大学で行われた調査では、5、6カ月もしくは1年の留学後のTOEICスコア29名の平均伸長得点は151点であったので（笠原、2018）、それと比べてもかなりの伸び率である。彼女は留学前のリスニングテストでは雑音程度にしか聞こえなかった会話が、留学中にやっと意味のあるものに聞こえ、英語話者との会話から何気ない日常表現を学ぶのが楽しかったと言っている。何度か彼女のクラスを担当しているが、授業中も積極的に課題への取り組みも熱心であったと記憶している。

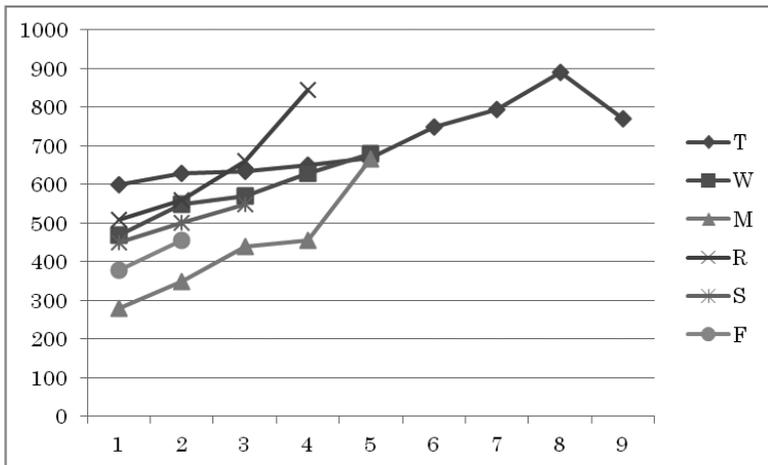
レベル2（初級）にクラス分けされた学生Fも初回スコアは377点であったが、2回の短期留学後のスコアは、78点プラスの455点である。彼女は次の目標をさらにプラス100点に定めて、近々受験を予定しているようだ。初回スコアが450点だった学生Sもまた受験の度に50点ずつ更新している。彼は特にTOEIC対策をしていなかったが、3回目受験の前にメディアセンターのe-learningで学習したと言っていた。しかし受験の度に勉強不足を痛感し、それがスコア結果に良く出ていると自覚している。彼は3回目の受験の前に短期留学をしているが、リスニングが容易になった気がする一方で、リーディングには変化が感じられなかったようだ。学生Wも4回の受験で徐々にスコアが上昇している。彼女は選択TOEICコース一単位の免除認定と短期留学費用の助成を受けられたことに感謝していた。留学後の伸びは60点だったが、その後も必死に自主学習を続けた結果、最終的に初回スコアより210点アップの680点を取得することができたと言っている。

今回調査対象になったどの学生にも言えることは、TOEICを受ける度に点数が伸長している点である。2017年と2018年の本学の結果によると、最低スコアは235点であるが、初回は英語力不足に加えて、テスト形式への不慣れからくる心理的な戸惑い、また時間配分を考慮する余裕のなさなど英語力以外の

要因も深く関わっている。また高得点になるほど伸び幅が狭くなるとも言われているので、よほど確実な実力がついていない限り、一度800点以上を取得した学生でも、それを維持することは難しいと思われる。学生が気軽に大学で申し込みができ、公開テストより安い料金で、慣れ親しんだ会場で受験できる本学でのIPテストの実施と実施回数の増加（近年年1回から2回に増加）は、学生が複数回受験することを容易にし、彼らのスコアアップにつながる方針であるのはまちがいないようだ。筆者は長年選択科目のTOEICクラスを指導して

表1 被験者6名のTOEICL&R トータルスコアの推移

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| T | 600 | 630 | 635 | 650 | 670 | 750 | 795 | 890 | 770 |
| W | 470 | 550 | 570 | 630 | 680 | | | | |
| M | 280 | 350 | 440 | 455 | 665 | | | | |
| R | 510 | 560 | 660 | 845 | | | | | |
| S | 450 | 500 | 550 | | | | | | |
| F | 377 | 455 | | | | | | | |



グラフ1 被験者6名のTOEICL&R トータルスコアの推移

いるが、学生には前回のスコア報告と目標スコアを聞くだけであったが、全員が真剣に次の受験に臨むように過去のスコアシートをしっかりと見せてもらい、個人的に話し合う必要があると思った。

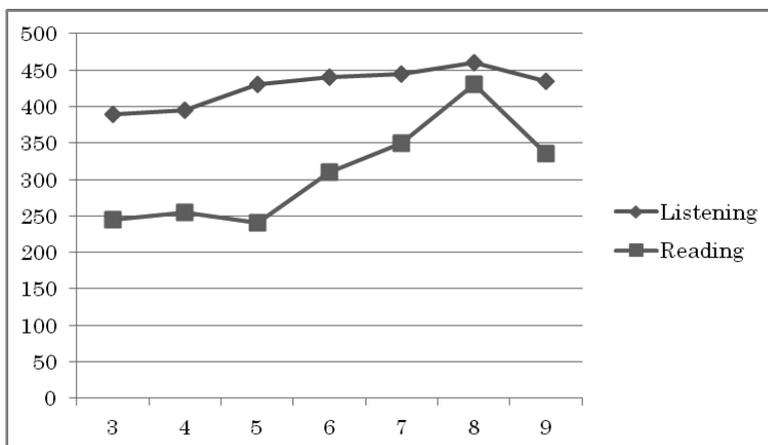
もう一つの特筆すべき調査対象者全員の共通点は、留学後のスコアが大きく伸びている点である。笠原（2018）の報告によると、留学経験者（中、長期）の留学前後のTOEICスコアの統計的検定を行ったところ、リスニングとリーディング共に有意差が見られ、英語力の伸びが確認されている。また6つの異なる留学先の大学間には差異は見られなかった。椋山女学園大学の学生の留学前のTOEICスコアの最小値390点が留学後570点、その最大値は745点が880点となっている。彼はまた留学前に読解力のある学生は帰国後にも大きく伸びているが、全体としてはリーディングの伸びは、リスニングの伸びに比べると低調であることが過去4回の調査でも顕著であり、学生の弱点であることも指摘している（笠原、2018）。

これは本学のIPテスト受験者（2017, 2018）のスコアからも明らかで、多くの学生のリーディングのスコアは低く、過去3回の平均値リスニング244点に対し、リーディングは179点であった。笠原（2018）の言うように、リーディングの力を伸ばすためには文字活字を読むという積極的、能動的な側面を要求されるものであることから、留学前にその力をつけるために、自らの読書に対する姿勢や習慣が大切である。学生Rは留学中に、積極的にリーディング練習を行ったことで、スコアが120点も上がっている。彼の場合、留学先で総合的英語力をつけたいという強いモチベーションに揺り動かされ、自らそれに向かって努力をしたことで向上したのだ。回りがすべて英語という留学環境もまた後押しになったことだろう。留学が英語学習の強い動機付けになることは明らかである。しかしながら、期間が1カ月程度の短期であった場合、現地の生活習慣や文化に戸惑う内に時間が経過し、リーディングのようなじっくり向かい合わなければならない作業までには手が届かないと思われる。

最終学年のTは、今回の調査協力者の中で最も多くの回数を受験しているので、彼のリスニング力とリーディング力の推移をグラフにしてみた。7回目と8回目の間に5カ月の留学をしている。8回目のリーディングのスコアが80点伸長し、かなりリスニング力との接近を見せたが、9回目で7回目より低

表2 学生Tの3回目から9回目の聴解力と読解力の推移

| 回数 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| Listening | 390 | 395 | 430 | 440 | 445 | 460 | 435 |
| Reading | 245 | 255 | 240 | 310 | 350 | 430 | 335 |



グラフ2 学生Tの3回目から9回目の聴解力と読解力の推移

い点数に下がってしまった。これには様々な要因が考えられるので、詳細は他の研究にゆずるとして、このグラフからわかることは笠原の指摘と同じようにリーディング力の不足である。

やはりリーディング力をつけるには、徹底した訓練が必要なようだ。対策の一つとしては、本学のメディアセンターに置かれている多数のレベル別ショートストーリーを活用して、各教員が積極的に多読を促すことが考えられる。筆者の担当する必修のリーディングクラスでは、各自が必ず何冊かの本を読むことを課題としているが、大半の学生は多読について肯定的に捉えていることがわかっている。調査対象学生の一人が指摘したように、英語教員は授業の中で素早く、的確に内容を捉える読みの技術を教える必要がある。しかしながら、母国語でその技術を習得していないか、または意識的にそのような読みをしたことがない学生にいきなりこの技術を英語で身につけさせるのは容易なことでは

はない。学生に母国語でも様々なトピックの読み物を時間を意識しながら、批判的に読むことを習慣づけることは学校全体の必須の課題である。

もうひとつ笠原（2018）が指摘する重要なポイントは、留学前にTOEICスコアが低い学生は、帰国後のスコアも低い傾向が強いということである。留学がTOEICの点数アップにつながることは、今回の調査でも明らかだが、留学前にやるべきことをしっかりとやって臨めば、期待以上の効果が得られるということも学生は知っていなくてはならない。しかし一方で、1年次に授業に関心がなさそうに見えた学生が留学を終えて再会した時に、生き生きと英語学習に取り組んでいる様子を目の当たりにすると、留学が英語学習の動機づけには一番手っ取り早い方法であることも否めない。しかしそれに伴う経済的負担もあり、すべての学生が留学経験ができるとは限らない現実もある。5カ月の中期留学を終えた学生Tは、学校から助成を受けてもかなりの経済的負担があったと報告している。異文化交流体験は刺激的であり、若い学生の知的好奇心を呼び起こす効果があることは明確である。そのため国際教養コース以外の学生も気軽に個人参加できる多様な留学先の選択肢を提示することも必要である。また学内に留学生を迎え入れることも、身近な異文化交流の機会を作る上で有効である。

5. 英語クラス編成についての提案

今回の聞き取り調査の中では、TOEIC以外に関しても特筆すべき点が挙がった。それは調査協力者の多くが、必修英語を国際教養コースの学生がそれ以外の学生と同クラスで学ぶ状況に疑問を持っているということだ。本学の学生は入学時の英語のプレイスメントテストの結果に従い、レベル1から7クラス（年によっては8クラス）に分かれて2年間の必修英語科目を受講する。しかし上級クラスの学生がすべて国際教養コースの学生とは限らない。上級レベルに配属されても英語に興味を持っていない学生も多い。そのため、やる気や興味のない学生と一緒に学ぶことは、自分たちのモチベーション低下につながるという指摘があった。

もう一つの問題点は基本的にプレイスメントテストで振り分けられたクラスからの移動が認められていない点である。必修科目を指導していて気付くこと

はクラス毎の英語力の差は歴然としているが、その中に他のクラスメートよりも明らかに英語力が勝っているかまたはその逆の学生もいる。またやる気や取り組み姿勢は、レベルに関係なく多様である。プレイスメントの妥当性や信頼性については別の研究にゆずるとして、今回インタビューに答えてくれた7クラス（中級）と4クラス（初級）に振り分けられた学生MとFの例を見てみたい。両者とも必修科目を受講中に、自分と他の学生の間に確かな英語力の差を感じていた。Mは授業が理解できない学生に自分が指導する場面もあったと言っている。Fは高校時代に準2級を合格しているにも関わらず、プレイスメントテストの結果により下から2番目にクラス分けされた。入学する前から国際教養コースを望んでいたが、自分のレベルよりも低いクラスで必修科目を履修しなければならなかったことに多少の不満を感じていながら、変更できないものと受け止め、誰にも相談しなかった。両者は、もし必修クラスのレベルを上げられるという選択肢があれば、間違いなく申請していたと言っている。

筆者自身の経験から言っても、必修科目ではどうしてもクラスの大多数のレベルに合わせた授業展開になり、初級のレベルではTOEICレベルの語彙や文法、読解には達することができない。やり抜く力の強い文化や集団の一員になることで力を伸ばせる（田口、2018）という報告もあるので、プレイスメントテストで振り分けられたクラスが自分のレベルに合わないか、そのクラスを望まない場合、特に英語が重要視される国際教養コースを望んでいる学生は、クラス移動申請ができるという柔軟さが必要かもしれない。しかしながら、それに伴う様々なクラス編成上の問題点にも留意する必要があるため、それは簡単なことではない。ただクラスを決定する際に、本人の将来的な希望などの個人的データを反映させる仕組みを作れば可能なことである。さらに言えることは、学生Fのようなケースを繰り返さないために、もし学生が目指すところに到達できない環境的障害がある時に、相談しやすい雰囲気づくりが必要であると共に、教員たちが学生の様子に今以上に敏感になり、声をかけてあげることも効果的かもしれない。教員が学習者と良好な関係を保ち、自分に個人的に注意を払っていると学習者が感じ取ることにもまた学習への動機づけになる（ドルニエイ、2012）

6. まとめ

今回の聞き取り調査の対象学生は、学校側が期待した通りにTOEICを受験をし、活用していた。TOEICスコアを確認することで、学習状況を反省したり、結果を励みにしながら、自身の英語力向上に役立っているようだ。初めての受験についての心理的不安を教員の細やかな指導で取り除くという点も重要課題である。また国際教養コースの学生が勉学に打ち込めるように、クラス環境をさらに整えてあげることも必要だということがわかった。

英語学習の本来の目的であるコミュニケーション能力向上において、留学制度は重要な役割を担っているが、助成金制度があるとは言っても、多くの学生にとって経済的負担は大きいという問題点もある。その解決策として、多様な留学先の提案や、学内での異文化交流の機会増加が考えられる。また、留学で最大限に英語力を向上させるためには、在学中の4技能の基礎力アップは必須である。そのためには、既に整えられているe-learningの設備や多読本などの教材を最大限に学生に利用させる工夫も欠かせない。また将来的には、アウトプット能力が確認できるTOEIC&Wの採用も検討する必要がある。

参考資料、参考文献

- 独立行政法人大学入試センター（2018）「『大学入試英語成績提供システム』の参加要件確認結果について」, <http://www.dnc.ac.jp/news/20180326-02.html> (2019/1/15/参照)
- ドルニエイ, Z. (米山朝二、関昭典訳) (2005, 2012) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』, 大修館書店
- Hsieh, C.-N. (2017) “The Case of Taiwan: Perceptions of College Students about the Use of the TOEIC Tests as a Condition of Graduation”, RR-17-45, ETS Research Report
- 池田容子 (2018) 「TOEIC® IP実施報告」, 山陽小野田市立山口東京理科大学紀要, 1, 67-72
- 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) 「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2018」, https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf (2019/1/15/参照)

笠原正秀 (2018) 「中期留学大15期生の選抜時と帰国後の英語力の伸長分析—
中期留学(英語圏)経験者の客観的英語力とその弱点—」, 言語と表現—研
究論集—, 15, 1-14

田口達也 (2018) 「TOEIC、学習時間、そしてやり抜く力—愛知教育大学の事
例から—」, 教養と教育 (Liberal Arts and Education), 18, 1-9